

《私たちはいつも赦されています》

マキシミリアノ・マリア・コルベについてご存知ですか？ アウシュビッツで身代わりに死刑となった方ですね。誰かのために死ぬことは、司祭として一番大きい役割だと思います。そういう状況に陥ったとき、葛藤が生じると思うのですが、もしそれを上手く克服できれば一番大きい恵みになるのではないかと思います。

コルベ司祭は、マリア様をとっても愛した方です。そして、子供のころにマリア様に会うという体験をしています。成人してから、この体験は夢の中でのものなのか霊的なものなのか、自分でもはっきりとは分からないと書き記しています。その体験の中でマリア様が現れ、いろいろな色のついた花が玉を見せたそうです。そして、その中で好きなものを選びなさいと言われ、選んだものは、白いものと赤いものでした。白が意味するのは、“純潔”、すなわち司祭となることです。赤が意味するのは、“殉教”です。そういう子供のときの体験をいつも意識していたので、マリア様に選ばれ、約束したことを必ず果たそうとする無意識があったのではないかと思います。だから、アウシュビッツで死刑にされる他の人の“身代わり”となるときにも決断がしやすかったのではないかと思います。

マキシミリアノ・マリア・コルベを通して皆様と分かち合いたいことが一つあります。私が日本のカトリック教会の中で一番弱いと思うことの一つは、殉教聖人をあまり大切にしないことです。日本でも600年前にカトリックの教えが入ってきて、たくさんの方々が殉教しました。しかし、日本の教会自体はその殉教者を尊敬するいろいろな叫びにあまり熱心ではありません。殉教の聖人がいなければ、教会は絶対に建てられません。殉教ということは、自分を捨てることです。一番基本的なことを強調しないことで、どのような発展を願うのかを示すことです。

先日、司祭たちの集まりがありました。テーマは殉教者についてでした。いろいろな国の司祭たちが自分の国の殉教者について熱心に語りました。それを見ている日本の司祭たちからも、なぜ私たちは殉教者について力を入れて来なかったのか、という反省の意見が出されました。そのとき私が強く感じたのは、殉教聖人を軽んじ、無視しながら教会がきちんと活動できるはずはない、ということです。日本の素晴らしい殉教の聖人が子孫達に大切にされなかったのは、私たちの間違いではないかと思えます。そして、このような共同体の生活の中で、もし、私たちにいろいろな形の殉教の精神がなかったら、どういう愛の実践ができるのでしょうか？殉教という言葉は誰かのために死ぬことです。こういう基本的な心が備えられていなければ他のことも無理なのではないかと思えます。

とにかく日本にも世界にもカトリックの中には素晴らしい生き方、死に方をされた聖人がたくさんいらっしゃいます。その方たちの模範に習おうとすることが必要ではないかと思えます。

さて、今日の福音(マタイ 18・21～19・1)では使徒ペトロがイエス様のところに近づいて聞いていますね。「友達が自分に対して罪を犯したら、何回許せばよいでしょうか、7回くらいでよいでしょうか」と。返事は、「7回どころか、7回の70倍でも許しなさい」でした。そして、たとえとしてされた話は悪い家来の話です。たくさんのお金を借金していたのに憐れみによって救われ、借金は帳消しとなります。ところが、救われた家来は、自分からもっと少ない額のお金を借りていた仲間に対してものすごく厳しい行いをします。その姿を見て、家来の借金を帳消しにした王様が、「不屈きものだ、私が哀れみによって赦したのにお前はなぜ許さなかったのか」とひどく叱ります。

この家来はよい人ですか？ それとも悪い人ですか？ ものすごく悪い人ですよ。仲間達も心を痛めて、王様に全てを告げたくらい常識に外れた悪いことをしています。この話を讀んだら誰も家来をよい人だと思う人はいないでしょう。ではなぜイエス様は、誰でもわかるこの話をたとえとしてお

しゃったのでしょうか。王様を神様としましょう。私たちは神様に、赦しの秘跡やそのほかのいろいろなことによってたくさん赦されています。自分の間違いに対する誰よりも深い憐れみによって私たちは毎瞬間赦されています。これは信仰的に見てみると、当たり前を感じられることです。もう、はかりきれないくらい赦しをいただいた私たちが、他の人に対しては、憎しみとかいろいろな否定的な感情を保ったまま生きるならば、この家来の話しは、私たちに対するたとえとなります。それでも、いつも赦すことは難しいです。腹を立てたものを赦そうとしても無理です。誰でも同じ立場だと思えます。しかし、赦さなければなりません。それがイエス様のみ言葉です。その時、赦しや救いのためにこのように考えてみましょう。【神様も今の私を赦してくださるのに、私は何の資格で人を赦せないのか。結局赦すことができなかつたら損になるのは自分ではないか。自分が一番つらくなるのではないか】。このような心の練習が私たちには必要ではないかと思えます。私たちが他の人を赦すために一番必要なことは、まずイエス様に赦されていることをよく悟ることです。その悟りが身につけば、たぶん何とか憎しみから解放されやすくなるのではないかと思えます。

このミサの中で、もし私が気づかなくても、私を憎んでいる人がいるならば、その人を守ってくださいと祈りましょう。そしてもし私が赦さなければならぬ人がいるならば、私の心も赦して、その人を赦せる恵みをお与えください、という気持ちでミサを捧げましょう。

ありがとうございました。